

にあり、両者の差は判然としない。一方（いない）については、普通児、PMD児とも高い傾向にあり、特にPMD児の11～12才が高い比率を示している。次に（父母）についてみると、11～12才の普通児に比べPMD児がきわめて低いことがうかがわれた。

以上の結果から考察すると、PMD児にとって、父母の占める位置が普通児より、きわめて低い。また、先生についてもわずかに影響を与えるのみで、病院職員と同じ傾向にある。わずかに友人による影響や話し相手があるのみで、信頼する相手も少ないうえ、自分自身のからにとじこもりがちで、自分だけの判断でものを考える傾向にあり、特に低年齢層において著しい傾向が伺われた。

26) 成人PMDのIQについて第1報

国立療養所箱根病院

稲 永 光 幸 中 村 正 敬
村 上 慶 郎

Duchenne PMDについての知能検査についての報告は数多くみられているが、成人PMDについての知能検査は比較的少ない。

私共は今回、国療箱根病院に入院または外来に通院中の成人PMD 13例（男子9例、女子4例、うちわけはLimb-girdle 4例、Facio-Scapulo-humeral 5例、Polyomyositis 1例、筋強直性ジストロフィー症3例である。年齢は18才から68才で平均31.5才である。使用知能検査はW-AIS成人用である。

全IQ (FIQ)は83.4±18.2と低下しており、従来のDuchenne PMDの成績と略同様の傾向をみせている。言語性(VIQ)と動作性(PIQ)の関係はVIQ>PIQとなっており、Duchenne PMDでの成績と逆の傾向がみられる。この一つの原因としては高年齢が関係すると思われるが、小教例であるので、更に症例を重ねる必要があると思われる。

IQ 50～80の低値群とIQ 90～120の高値群との間のプロフィールの差は、言語性において単語問題の得点に極めて大きな差がある。動作性では低値群に、符号・積木・組合せ問題に落ち込みがみられる。これは知覚・運動系の障害によるものかも知れないが、必ずしも機能障害の程度とは一致していない。

3例の筋強直性ジストロフィー症についても同様の傾向にある。

以上、比較的少数例なので、更に症例を重ねて、検討を加える予定である。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

Duchenne PMD についての知能検査についての報告は数多くみられているが、成人 PMD についての知能検査は比較的少ない。

私共は今回、国療箱根病院に入院または外来に通院中の成人 PMD13 例(男子 9 例、女子 4 例、うちわけは Limb-girdle 4 例、Facio-Scapulo-humerdl 5 例、Polymyositis 1 例、筋強直性ジストロフィー症 3 例である。年齢は 18 才から 68 才で平均 31.5 才である。使用知能検査は WAIS 成人用である。